

日本語教育における読解のスキルアップ（スキル向上）問題及び課題

Fatiyah

(ファティヤ)

ドクターストモ大学文学部日本語学科

fati0710@gmail.com

要旨

現在、インドネシアでは日本企業の日本駐在員の方々は通訳者として採用したインドネシア人の人材に対して不満を抱く。これは、勤務後に能力を磨くよりもやはり語学を学習している間に大学で学習させ、スキル向上させた方が良いであろう。では、言語能力の中にどの能力を中心にし、学習した方が良いかは議論になっている。本研究では4つの言語能力の関係性を解明する。また、能力を向上させる方法に関して研究する。研究方法は、文献レビューまたは文献研究である。上記の言語能力において4つとも精密な関係性を持つ。その4つのうちの「読解力」が他の能力に大きな影響を与えることが考えられる。また、この「読解力」を向上させるためには、「文法」「語彙」の能力を増やす必要がある。そして、「読書」機会も増やすべきであろう。それによって「文法」や「語彙」以外にも「文化的知識」も増え、「読解力」も向上できるであろうと考えられる。
キーワード: スキル向上、「言語能力」、「読解」

A. はじめに

1. 背景

今日インドネシアにおいては日本語学習者の数が上昇すると共に、日本関係の就職先も多くなってきた。日本企業にて就職できるという目標を達成するために、日本語を勉強するインドネシアの学生が徐々に増えてきた。

しかし、ここ数年採用する日本の会社からは、日本語が優秀な卒業生がなかなか見つからないと

の声上がる。これは、日本語能力検定試験（JLPT）N2 や N1 レベルを合格した日本語学習者の数が少ないからだろう。日本語が流暢に話せ、漢字も理解できるインドネシア人の方がいるが、採用する側の期待に応えられないという批判の声も出てきた。駐在している日本人の方々は通訳者として採用したインドネシア人の人材に対して不満を抱く。勤務している間に能力を磨くことは可能であるが、

最良なのは、やはり卒業前に能力アップをすることである。競争が激しい現在においては、言語能力が優秀で要するに上級レベルを持っている方を採用したいというのが外国企業の希望である。ただし、この希望にはなかなか応えられない。

第 2 言語を習得するには、4 つの言語能力を学ばなければならない。4 つ言語能力とは話すこと、聞くこと、書くこと、そして読むことである。日本語教育上では、この 4 つの言語能力をどのようにして日本語学習者に教えるべきかに関する議論は多くなされる。本書では、どのように上級日本語が習得できるのかこの 4 つの言語能力の中の一つである「読解能力」を向上させる方法を述べる。

2. 研究問題

本書の問題点は次の 2 つである。

- a. 読解力は他の言語能力（書くこと・話すこと・聞くこと）とどのような関係を持っているのか。

- b. 読解力を上げることによってどのような影響があるのか。

3. 研究目標

本書の研究目標については以下に述べる。

- a. 読解力は言語能力のスキルアップにどのような関係を持っているのかを明らかにする。
- b. 読解力のスキルアップ（スキル向上）にどのような影響が出るのかを明らかにする。

4. 研究利点

上記の目標が達成できた場合、本書の研究結果は日本語教育においての日本語スキルアップに役に立つ。また、日本語学習者の日本語能力のスキルを卒業する前に高められた場合、その人材の価値自体も上がるだろう。

B. 先行研究

本節では、先行研究として第 2 言語コミュニケーションが上達するために日本語教育方法に関する論文を紹介する。

**1. Bozorgian, Hossein (2012)
“The Relationship between
Listening and Other Language
Skills in International English
Language Testing System”**

ボゾルギアンは言語能力の「読む・書く・聞く・話す」の中で最も影響力があるのは「聞く能力」だと述べた。筆者は、トルコのテヘランにおいて IELTS (*International English Language Testing System*) を受ける 1,800 人のトルコ人に調査を行った。研究結果は、「聞く能力」は他の言語能力に大きな影響を招き、他の言語能力と密な関係を持っているということが述べられた。IELTS を受ける人はある程度の英語能力を持っているということは否定できない。IELTS を受ける前に、事前対策を行う人も少なくないと考えられる。どの能力がどの能力に影響するかはなかなか IELTS 評価結果から判断しづらいことも考えられる。実際ボゾルギアンが述べたような結果が正しいかどうかは疑問が残っている。筆者は本書で多くの文献を研究し、各言語能力

はどのような関係を持っているのかに関して探る。

**2. 阿部祐子 (2006) 「読解力」
育成に関する研究」**

「読解力」は時代を問わず、人間が生活していくうえで必要不可欠な能力であると阿部は述べた。また、情報を含んだ媒体の種類に応じて「読解力」育成の取り組み方を工夫する必要があるとも述べられたが、阿部が説明した工夫とは多くのメディアを利用し、「書物」及び「書物以外の媒体」の両方の視点が必要だと述べ、読書の頻度を増やすことを工夫の一つとして提案している。本書では、読書のみではなく読み物の理解が必要のため、筆者は読書の頻度ではなく、どのように理解度を高めることができるのかを中心とし、深く探る。

C. 研究方法

本研究においては文献研究 (Literature Review/LR) を行い、科学的資料を分析する。Garrard (2011) : LR は「特定のトピッ

クに関する科学的資料の分析である。研究目的を評価し、科学的方法の適切さと質を決定し、著者によって提示された研究課題とその答に対する分析方法を精査し、異なる研究から得られた知見を要約し、最終的な知見に対する客観的な統合結果を書き上げるために、それぞれの研究を注意深く読み込むことが要求される。

本研究においては、まずは科学的な文献（ジャーナルや書物やネット上で投稿される科学的資料など）を探り、内容を確認した後にテーマ別に分ける。研究問題に関連する資料に焦点を絞り、詳しく解説する。その後、分析し、結論を述べる。課題として残ったものに関しては今後の課題として考え、結論を記述する。

D. 分析

1. 言語能力の関連性

言語能力は基本的に「聞く・話す・読む・書く」の4つの技能で表現される。これら4つの技能は独立したものなのか、互いに密な関係を持っているものなのかは

明らかではない。一般的な母語の習得順序を考えると、人は生まれて間もなく両親や養育者の話す言葉を聞き、それをまねて話すようになる。そして幼児期に絵本を読み、聞かされ、文字を覚えて、まねて書くようになることを考えると、言語は「聞く→話す→読む→書く」の順で習得され、これら4つの技能は密接に関わりがあることは否定できない（Oishi, 2001）。

ボゾルギアン（2012）も言語能力の「読む・書く・聞く・話す」の中で最も影響力のある言語能力は「聞く能力」だと結論を出した。彼の研究は、トルコのテヘランにおいて IELTS（*International English Language Testing System*）を受ける1,800人のトルコ人に調査を行った。研究結果として「聞く能力」は他の言語能力に比べ、大きな影響を与えることが明らかになった。また、他の言語能力と密な関係を持っているということが述べられた。言語能力の検定試験のような IELTS を受ける人はある程度の英語能力を持っている

ということは否定できない。**IELTS** を受ける事前に、事前対策を行う人も少なくないと考えられる。どの能力がどの能力に影響するかはなかなか **IELTS** 評価結果から判断しづらいことも考えられる。

筆者は上記のボゾルギアンと異なり、本書では多くの文献を研究し、各言語能力はどのような関係を持っているのかに関して探してみたい。本当に「聞く能力」が他の言語能力に影響するのだろうか。未だにその4つの言語能力のうち、どの能力が一番他の能力に影響を及ぼすのかを議論になっている。

語学教育といえば、最初に挙げられるのは、「文法」と「語彙」であろう。外国語教育においては、母語教育と異なり、数語からなる挨拶の決まり文句と、それに続く会話のやり取りから始まることが多い。会話を続かせるためには、例えば、基本的な名刺や動詞の組み合わせ方がどのような形に変わるか、などその仕組みを学習する。

その基礎だけを考えてみると、「文法が語学学習の根本的な出発点になるのではないかと考えられる。それに伴う「語彙」の必要性も不可欠なものになる。認知言語学では、「語彙」と「文法」を連続したものとする。

「語彙」と「文法」は語学を学習する認知力として不可欠なものである。これが、日本語言語能力にどういう関連を持っているかを明らかにしよう。「語彙」と「文法」を言語取得力のレベルに伴い、ある程度把握できる場合、言語能力にも影響を与えてくる。

また、「文法」と「長文」に関しても、不可分の部分がある。たとえば、強調構文や目的語文頭繰上げなどは、情報の流れによって、用いるのが適切であったり、用いるのが不適切であったりする。

以上のように、「文法」には、基本的な文型に関するきめ細かい知識から、「会話」や「テキスト」における流れの中で適切性が決まるようなことまで、多岐にわたる。「語彙」は従来、その

ような分類整理がされている、「会話」や「長文読解」や、テーマ別・場面別会話テキスト、テーマ別読み物などにより付随的に学習できると考えることもできるが、大学教養課程において語彙力を格段に増やす上で、**vocabulary building** という独立した科目を立てること自体は、新しい試みとして試行する価値はあるであろう。ただし、現在はまだ実行されていない。

「会話」より「長文」を含む「読解」の方が「文法」、「語彙」、「情報の流れ」、「文化的知識」が入っていると考えられる。「読解」の能力を向上させることによって、文法知識や語彙知識が増える可能性が高い。それによって、会話力、記述力、聴解力も向上できると考えられる。聴解力は耳を慣らす必要があり、聞く練習が必要とされるのは否定できないが、語彙知識が増えることによって話の流れが理解できる確率は多くなるのではないかと考えられる。

筆者が考えている 4 つの言語能力の関係性とは、「読解力」を高めることによって、「文法」、「語彙」、「文化的知識」なども向上させ、「会話力・話す能力」、「聴解力・聞く能力」、「記述力・書く能力」にも大きな影響を与え、日本語能力全体が上達できるという精密な関係性を持っている。

2. 「読解力の学習方法」

阿部（2006）が記述した通り、「読解力」は時代を問わず、人間が生活していくうえで不可欠な能力である。「書物」などは、時代に合わせ記述されるものである。

「書物」を通して、その時代の流れ、当時の人々の考え方などが理解できるようになる。「文法」や「語彙」はもちろん、文章に含まれる文化的知識も理解度を高める。阿部は読書の頻度を多くすることによって、「読解力」も高めることができると述べたが、工夫は頻度のみでなく、「読書」の内容理解自体の能力を増やすべきであろう。

「読解力」の向上の前に、「文法」の数、語彙の数も増やすのが理想的であるが、文章全体の理解で「文法」や「語彙」の意味を推測することが大事である。正しい理解になっているかどうかは読書する時に読み物の結論のところに確認できると考える。

学年やレベルによる「文法」や「語彙」の数を決め、日本語教育の中に設定するべきではないだろうか。ある程度決められた「文法」「語彙」の数が把握できた時点で読書をする、より理解ができるであろう。

E. 結論

多くの文献を考察し、筆者は以下の結論を考えた。

1. 結論

本書の結論として以下に記述する。

- a. 外国語を学習する時、4つの言語能力があり、「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」能力がある。各能力は精密な関係性を持っている。一つの能力が他の能力に影響を与える

ことが明らかになった。どれが最も他の能力への影響力を持つのは議論になっているが、本書では理論的には「読解力」が一番影響を与えていると解明できた。

- b. 「読解力」を高める方法としては、「読書」の回数または頻度を増やすこと以外に、「文法」「語彙」能力も増やす必要があると考えられる。それによって、文法知識、語彙知識、尚且つ文化的知識も増えてくるのではないかと考えられる。

2. 課題

これからの研究として次の課題が残っている。

- a. 上記の研究は理論的に探った研究結果であり、調査や事例研究を行う必要があると考える。
- b. 読解力を高める方法についても実証しなければならない。これから別のプロジェクトとして考えている。

参考文献

- Abe, Yuko. 2006. ““Dokkairyoku” Ikusei ni kansuru Kenkyuu”. Osaka Ohtani University. melalui http://www.osaka-ohtani.ac.jp/common/img/department/welfare/download/033_p53.pdf <26/01/2018>
- Aizawa, Kazumi. 2011. “Dokkai In okeru Goi Kaba-ritsu to Rikaido no Kankei”. *Kyouzaigaku Kenkyuu* Vol. 22. 2011.
- Akita, Michiyo. 2006. “Dokkairyoku Ikusei no tame no Kyouiku Jissen to Sono Hyouka”. Dai 9 Kai Kenkyukai Tokyo University. melalui <http://www.p.u-tokyo.ac.jp/sokutei/pdf/vol06/p126-142.pdf> <26/01/2018>
- Bozorgian, Hossein. 2012. “The Relationship between Listening and Other Language Skills in International English Language Testing System”. *Theory and Practice in Language Studies*. Vol. 2. No. 4. 2012. Pp. 657-663.
- Garrad, Judith. 2011. “Health Sciences Literature Riview Made Easy: The Matrix Method”. Jones & Bartlett, Sudbury.
- Kimura, Yukino. 2014. “Setsumeibun Dokkai ni okeru Te-ma Rikai: Yomi no Mokuteki to L2 Dokkai Jukutatsudo ni kru Eikyuu”. *Arele: Annual Review of English Language Education in Japan*. Vol. 25. 2014. Pp. 111-116.
- Koiso, Kaoru. 2008. “Joui Youin Ag Eigo no Dokkairyoku to Kaiwaryoku In Oyobosu Eikyuu”. *JGSS Research* Vol. 10. No. 7. 2008.
- Maeda, Yuki dan Matsumi, Norio. 2008. “Chuu, Joukyuu Nihongo Gakushuusha no Choukairyoku wo Yosoku Suru Goiryoku to Mondai Kaiketsu Nouryoku”. *Ryuugakusei Kyouiku* Vol. 13. 2008.
- Miyazaki, Sachie. 2014. “Tabunka no Kodomo no Kate ini okeru Gengo Shiyou to Gengo Ishiki”. *Sophia University Junior College Division Faculty Journal*. Vol. 34. 2014. Pp 117-135.
- Nishigaki, Junko. 2001. “Houkatsuteki Dokkai no Purosesu to Sore wo Sasaeru Youin In tsuite”. *Toukyou Daigaku Daigakuin Kyouikugaku Kenkyuuka Kiyou*. Vol. 47. 2001. Pp. 305-316.
- Noda, Hisashi. 2012. “Komyunike-shon Nouryoku wo Takameru Nihongo Kyouzai”. *Journal CAJLE*. Vol. 13. 2012.
- , 2014. “Joukyuu Nihongo Gakushuusha ga Gakujutsu Ronbun wo Yomu toki no Houhou to Kadai”. *Journal of Technical Japanese Education*. Vol. 16. 2014. Pp. 9-14.
- Oishi, Harumi. 2001. “Gengo Nouryoku no Tajigansei ni tsuite no Kankei Gakuteki Kousatsu”. *Kinjo Gakuin University* melalui

- <
https://ci.nii.ac.jp/els/contentscin ii_20180215184528.pdf?id=AR T0001215447> [28/01/2018].
- Onozato, Satoshi. 2010. "Nihongo Nouryoku Shiken 1 Kyuu to Joukyuu Nihongo Gakushuusha kara Mieru Kadai: Chuugokujin Ryuugakusei no Jirei kara". Niigata Keiei Daigaku Kiyou. Vol. 16. 2010. Pp. 183-190.
- Shibutani, Kimiko. 2015. "Joukyuu Dokkai ni okeru "Midoku" no Kokoromi". Journal of Japanese Language Education Methods. Vol. 22 No. 2. 2015. Pp. 14-15.
- Takanashi, Shino et al. 2017. "Joukyuu Nihongo Gakushuusha kara Mirareru Bunpou no Mondai". Handai Nihongo Kenkyuu. Vo. 29. 2017. Pp. 159-185.
- Thanyarat, Sangan Sri. 2016. "Gaikokugo toshite no Nihongo ni okeru Dokkai Fuan, Gaikokugo Gakushuu Fuan, Dokkairyoku to no Kankei". Kanda Gaikokugo Daigakuin Kiyou Gengo Kagaku Kenkyuu. Vol. 22. 2016. Pp. 45-64.